呼吸器内科

診療科紹介 HP

診療部長紹介

診療部長の峯下昌道です。よろしくお願いいたします。出身地は福岡県です。防衛医科大学校を1986年に卒業し、各地で自衛隊診療に従事した後、2006年にこちらに赴任いたしました。2015年4月に前任の宮澤輝臣先生から診療部長を引き継いでおります。得意分野は慢性閉塞性肺疾患ですが、初診患者様には幅広く対応させて頂きます。

診療部長
峯下 昌道（主任教授）

診療科の特色

当科の特徴は呼吸器内視鏡気管支鏡による診断と治療です。肺がんの気管支鏡検査においては90%前後と高い診断率をあげております。気道狭窄に対するステント等による気道拡張術は全国でも限られた施設でしか実施していないこともあり、関東一円から年間数十例の紹介患者を受け入れています。重症肺気腫に対する気管支鏡的肺容量減量術は令和5年末に保険承認されましたが、本邦第1例目を当科で実施いたしました。もちろん川崎市北部地域を支える特定機能病院の呼吸器内科として肺がんや間質性肺炎、COPD等様々な呼吸器疾患の診療に対応しておりますので、患者様のご紹介よろしくお願いいたします。

患者さんのご紹介について

聖マリアンナ医科大学病院
ST. MARIANNA UNIVERSITY HOSPITAL

044－977－8111（代表）

044－975－0608

紹介受付時間：平日８：３０～１５：００
土曜８：３０～１１：００

医療機関からのWEB予約サイトはこちら

聖マリアンナ医科大学病院
患者さんの紹介について

お問い合わせ先：メディカルサポートセンター

①肺がん診断をサポートする気管支鏡検査の取り組み

肺がん診断のための気管支鏡検査についてはCT読影技術、ナビゲーションシステムおよび超音波内視鏡等を駆使し、90%前後の高い診断率を維持しています。分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬等の適応を判断し、最適な治療を選択するためには質の良い検体を十分量採取する必要があり、生検方法や部位選定の工夫や、クライオバイオプシー等の新規技術の導入により治療方針決定に役立つ検査が実施できるよう努めています。胸部異常陰影の患者さんがおられましたらご紹介よろしくお願いいたします。

②気管支バルブを用いた肺容量減量術の実施について

重症肺気腫に対する気管支バルブによる気管支鏡的肺容量減量術が2023年12月に保険承認されました。当科はこの新技術を日本に導入する中核施設と位置付けられ、2024年3月から治療を開始いたしました。重症の肺気腫で十分な内科的治療でも症状が緩和されない患者さんが対象となります。そのような患者さんがおられましたら、ご紹介いただければと思います。しかしながら、この治療は気胸などのリスクもあり、また適応基準も厳格であるため、治療の適応については慎重に判断させていただきます。

□ 各種検査について

・気管支鏡検査：気管支腔内超音波（EBUS）

肺がん等の呼吸器疾患が疑われる患者さんを対象に、気管支鏡で病気の場所から組織や細胞を採ってくる検査です。採取した標本は悪性かどうかの判定や細菌の同定等に使用されます。末梢の病変には超音波ガイドシース法を用いて高い診断率が得られています。

・経気管支リンパ節生検：コンベックスタイプの超音波ガイド下針生検（TBNA/EBUS）

コンベックスタイプの超音波ガイド下針生検でリアルタイムに針が観察でき安全に縦隔リンパ節等、気管・気管支外の病変を穿刺することができる、肺癌の臨床病期分類等に非常に有用な検査です。その他サルコイドーシスなどの縦隔リンパ節が腫大する疾患の診断にも応用されます。

・蛍光気管支鏡(AFB)、狭帯域光気管支鏡（NBI）

普通の気管支鏡ではわかりにくい早期中心型肺癌ですが、蛍光気管支鏡は自然蛍光の欠損によりこのような病変を検出することが可能で、早期治療に結びつけることができます。同様に狭帯域光気管支鏡は悪性疾患に伴う異常血管新生を早期に検出することができます。